



花粉症と薬

花粉症とは、体内に取り込まれた花粉成分の刺激によって体内にある「肥満細胞」の膜が破れ、ヒスタミンやロイコトリエンなどの化学伝達物質が飛び出してしまうために引き起こされるアレルギー反応です。飛び出した化学伝達物質が、神経や粘液の分泌腺、血管などにある「受容体」という機構にくっつくことでくしゃみ、鼻水、涙目などのあらゆる花粉症の症状が起こるのです。

抗ヒスタミン薬

神経や血管にあるヒスタミンの「受容体」に先回りして、ヒスタミンの働きを防ぎます。くしゃみや鼻汁が主症状である場合によく使用され比較的早く効果が発現します。しかし、ヒスタミンという物質は脳においては、身体や心の機能を保つ働きも持っているため、薬が脳のヒスタミン「受容体」にも作用すると眠くなる、身体がだるくなるなどの副作用を引き起こす場合があります。

抗ロイコトリエン薬、抗プロスタグランジン D2・トロンボキサン A2 薬

ロイコトリエン、プロスタグランジン D2、トロンボキサン A2 の「受容体」に先回りし、これらの化学伝達物質が作用するのを防ぎます。鼻粘膜の血流を改善する効果があり、鼻閉が主症状の場合によく使用されますが、鼻汁、くしゃみの改善効果もあります。内服を始めてから1~2週間で効果が発現します。

化学伝達物質遊離抑制薬（肥満細胞安定薬）

「肥満細胞」の膜が破れるのを防ぎ、花粉症の症状を抑えます。作用はマイルドで、内服を始めてから2週間程度で効果が発現します。副作用は少なく、くしゃみや鼻汁が主症状の場合によく使用されます。

ステロイド薬

主に、炎症反応を抑えることでアレルギー症状を改善します。花粉症症状が強い患者さんでは、経口ステロイド薬を4~7日間に限って使用することがあります。全身性の副作用が現れる場合があるので長期間の使用は出来ません。

点鼻薬

鼻噴霧用ステロイド薬がよく使用されます。鼻閉によく使用されますが、くしゃみや鼻汁の改善効果もあります。1~2日で効果が発現し、長期連用しても全身性の副作用が少なく安全性の高い薬です。

重症の鼻閉には、必要に応じて点鼻用血管収縮薬を7~10日間に限り併せて使用します。鼻閉が強い場合には速効性がありますが、連続使用により効果の持続時間が短くなり、使用回数が増えていくという悪循環に陥ることがあるので長期間の使用は出来ません。

点眼薬

目の痒み、充血、流涙などの症状には点眼用抗ヒスタミン薬や点眼用化学伝達物質遊離抑制薬が使用されます。症状が激しい時には点眼用ステロイド薬が使用されることがありますが、緑内障や感染などに注意が必要です。

